

美之國

大正十四年四月二十三日第三種郵便物認可（每月一回一日發行）
昭和十三年十一月二十八日印刷納本 昭和十三年十二月一日發行

第十四卷第十二號（通卷第六十三號）

14 卷

12 號



— 弔花 —

臙庵櫻谷居士を懐ふ

近時頻々として畫壇の老功者の亡くなるはいよいよ深げゆく秋とともにしみじみと寂しさを痛感します。最近逝かれし木島櫻谷君とは同窓の親友として、四十年來の馴染みですが、互に老境に入りし懶さに近頃は全く疎遠に過して居りました。先日西村五雲翁の葬儀の席で久々に相會し、互に健康を喜びあつたのでしたのに、慮らずも忽然逝かれたには全く驚嘆且痛惜の極みであります。

櫻谷君は京の三條室町の商家に生れたのですが、祖先に繪筆を執つた人もあつたので、早くから今尾景年先生の門に來り、側ら儒家山本章夫亡羊翁に就て經學を修め能く其道に造ひ、その堅志力行の半生は實に立志傳中の人と稱せらるべきです。而も天稟の才は津々として喚發せられて、早熟には斯界を畏怖せしめたものです。既に舊文長第一回には未だ歳三十に足らずして、最高の貳等賞を卒先して受領して、拔群の榮譽を博し、勢に乗じて毎回赫々たる成績を續け當時獨歩の名聲は、忽ち蔚然たる一家

上 田 萬 秋

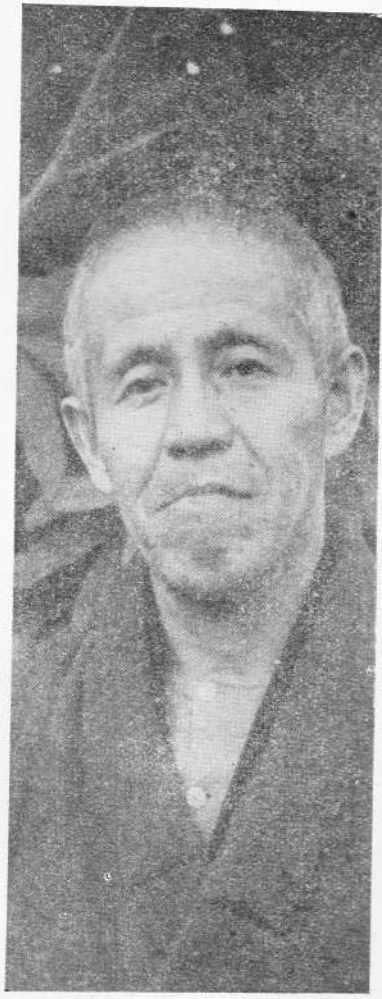
を成したのであります。作を需むるもの亦雲の如く門に集るといふ有様で、茲に洛北小松原景勝の地に邸を構へ、已來筆研に専念する外、詩書を友として殆ど世交を絶ち、門を閉ぢて出る事も稀なりと人はいへり。又世上其巨富を云ふものあるべきも、寧ろ美望すべきは、その蒐集せられたる汗牛充棟の書籍と和漢聖賢志士文人の墨蹟等堆積して山を成すべく、其他甲冑武器の藏せら

れて豊富なる。是れによつても君の多識なりしを窺ひ得らるゝでしよ。窃に杞憂するものは若しこのまゝ秘藏する而已ならば徒らに蠶魚の飼となるべきを懼るゝのであります。其外自筆の詩稿など少からざるべく何れ發表の機を待ちて君の風靡を偲び得ることよし、晩年は全く悠々自怡の境に籠居して、専ら老を養ひ居られたと思ひ居りに、神經過勞症にて不慮終りを早められたるは何とも遺憾の極みであります。噫

挽 歌

歸花咲くさへあるに君のゆく
みそらは月の影のみそさゆ

十一月初しるす



在りし日の木島櫻谷氏

弔花

逝く君も残る我等も秋の暮

徳美 大容 堂

(前略) 五雲さんの死について櫻谷老の死は驚かされました。論語讀みの木島君として青年時代からその克明さが京都畫壇では通りものでもありました。文展以前から京都では樓風門の橋本菱華、芳齋の川北霞峰と三羽鴉の稱があつたほどです。才人菱華は早く失脚して今は故人となり、櫻谷亦逝いて残るは霞峰老のみ、此人も時代を善悪とも超越してゐるかとおもひます。櫻谷老も青年時代から才人であり努力精進家でもありました。山縣悌三郎主幹するところの少年園文庫青年文などの愛讀者でもあり詩文の投書家でもあつたのです。今は藝術院會員となつてゐる河井醉茗翁とも相知るところあり、文展初期櫻谷の名華やかなりし時分醉茗が櫻谷を訪ひ情死を誘つたといふ珍挿話が残つてゐます。醉茗はその時分失意の逆境にあり「君は今尤も得意の境地にあれど永生すれば必ず忘られる人とならう、今死ぬのが君のためにもよい」と言つたりしたといふのです。此話は僕が直接櫻谷老に聞いたものでありませんが、老の小

學生時代からの友人芝千秋君の他に談つたところでは、千秋はやはり畫人であり騎人傳中にあるやうな京名物の一人でもありません。此人に櫻谷老の昔話をきけば面白いものがあるかと思ひます。文庫青年文時代の醉茗の詩とその名とは僕にとつても忘れ難いものです。醉茗老に逢はれるやうな機会はありませんが、老はたしか早稲田にも關係があつたかとおもひます。

櫻谷の孤獨性は明暗の両面があつたのですが、あゝした最期は過失であつたか自殺であつたか僕には全くわかりかねます。酒吞まず、女道樂などした人でない、論語を唯一の友としてゐたやうな此人の半面にも人間苦はあつたらしい。(中略)櫻谷君は字が上手でした。山陽のお書きものが好で可なり澤山もつてゐた筈です。その他儒者物の書を多く蓄積してゐたかとおもひます。實兄が千總の一番頭で、その關係から昔から千總所藏の竹堂翁の孫に示唆さるゝところ深かつた櫻谷でもありました。景年門に入つたのは竹堂歿後のこと竹堂さへ生きて

ゐたなら當然竹堂門の人となつてゐたことでせう。そして五雲、英舟と兄弟分となつてゐた譯です。

櫻谷君と五雲君との古い消息類をしらべてゐると、櫻谷君の詩稿が一枚出てきました。何か御材料にもならばと同封しました。櫻谷君は繪も字もキチンと昔からきまつて書こんで文展以前既に老成といひたいところがありました。詩そのものはあまり良いとも言へないやうですが、一通り出来てゐるものと存じます。舊文展の成績は京都側ではとにかく随一だつたのです。次で菊池契月君と橋本關雪君があり(契月君は一回不出品關雪君は第一回鑑別)京都でいへば先輩の都路華香さんなども其成績は及ばなかつた。畫壇過去帳として僕は亡友のおもひ出をひとつまゝとめておめにかげやうかとも思つてゐます。來年のことを言へば鬼に笑はれるかも知れませんが、如月號にでも出して頂けるやう心がけて書いて見ませう。

如月の友より里へ便かな

信濃路や如月寒き佛達

僕のこんな舊作の句を今ふと思ひうかべてゐます。櫻谷君の死に對しては左の三句あり。

夜寒さの道をだまつてゆかれたか

稻妻に君釋然と逝きけんか
逝く君も残る我等も秋の暮

徳美大容堂氏の右の二文は本社主幹宛に寄せら

木島櫻谷の禁慾主義

昭和十三年の秋漸く深い十一月の上旬、
帝展審査員木島櫻谷氏が京阪電車の沿線牧
方に於いて京阪電車に觸れ死去されたニユ
ースに畫壇關係者は勿論、一般人も驚愕し
た。其の後判明したところに依れば、豫て
神經衰弱にかゝつて居た同氏は夢遊病の状
態で京阪電車の軌道に沿ひ彷徨して居たの
を電車の車掌が誤つてなした災難らしく、
傍をつけた老人が事件の起る前に線路傳ひ
に彷徨して居るのを見たものが居ると新聞
のニュースは報じた。

山水畫の大家、鹿と狸の名人の櫻谷とし
てその名聲は天下に嘖々、廣く名が知られ
て居る點では竹内栖鳳、木島櫻谷、橋本關
雪、菊池契月の四大家が京都の作家として
最も有名であらう。

木島櫻谷は、過去の畫的經歷から言つて
帝室技藝員、帝展會員が至當であらうが不
遇にして、古參の帝展審査員に過ぎなかつた。
事實、その生活と思想とは社會的關
係から次第に消極的になつて終には社會と

れたお手紙であります、よく櫻谷氏を語つて
情餘るものです、敢えて掲載する所以です。

——編輯部——

吉 副 禎 三

交渉を持つ事を好まない様になつたらし
い。松本亦太郎博士はその著『現代の日本
畫』に於いて「京都の畫家で詩を作り得る
畫家は橋本關雪と木島櫻谷の二人位に過ぎ
ない」と言つて居る位で、櫻谷は漢學に通
じ、詩をよくした。その人格の高い事は既
に令名があつたが、その人格を故意に誹謗
する者は木島家に莫大な資産がある事を舉
げる。けれど、木島家の財産は、經財觀念
に乏しい櫻谷氏のために親族の某實業家が
面倒を見て土地を買つたが市街の發展に伴
ひ土地が騰貴して出來たのが主な財産であ
ると聞く。櫻谷氏は潔癖な程、財物を愛せ
ず、金錢を懐中する事さへ嫌ひ、外出に際
しては身に一錢をもつけず、門人に持たせ
た。禁慾主義的傾向が非常に強く、京に生
れて、京極に行つた事なく勿論祇園などは
全然知らなかつた。自らは常に粗衣、懐中
に詩書を抱き禁慾的生活に満足しながら苦
學生に學資を給し、大學を卒業させたエビ
ソードは甚だ多い。禁慾主義は處世的意味

宗教的意味道德的意味とに區別されるが大
體に於いてその意圖は、より低い、より小
なる、又は暫定的不確定的と見える價値を
斷念する事に依つて、より高い、より大なる、
又は恒久的絶對的價値を求めやうとする
にある。従つて精神的ではあるが消極的
になり易い。消極的な生活に進む禁慾主義
的生活の可否は別として、莫大な財産を樂
しまず、禁慾的で、愛他的で、藝術を愛し
藝術に悶えて、神經衰弱になり、そのため
災難に逢つて櫻谷は世を去つた。その最後
まで、質素な着物に袴をつけ、一錢の金子
をも懐中せず、懐に持つものは一冊の寫生
帳のみであつた。その最後は藝術家とし美
しくも尊いではないか。

櫻谷の藝術は四條圓山あたりの形式を活
用し、個性が働らいて櫻谷自らの表現様式
を創り出した。その特徴は、表現に於いて
自然の現實性をダめず相化され、禁慾的で
愛他的な歡喜に富む瞑想的精神をその藝術
的直觀の中で結合せしめるに在り、その表
現は刺激そのものを目的とするところの刺
激性の過大性がないので、その藝術作品は
含蓄に富んでも平明で親しみに富む。そこ
が櫻谷の作品が愛される所以でもあり、そ
れは櫻谷の精神と生活との顯現である。

木島櫻谷は、明治十年京に於いて狩野派
の畫家の孫として生れ、今尾景年に師事、

第一回文展に於いて、春草の『賢首菩薩』、九浦の『辻説法』と共に二等賞を得、その第一席として名聲噴々、次いで『若葉の山』『寒月』を出品、晩年には、昭和六年帝展に佳作『畫三昧』、京都市展第一回に『吾むす庭』、第十五回帝展に『角とく鹿』を出品其の後は出品を見なかつた。『畫三昧』は、白色無地の着物を着、淡墨色無地の袴をはき淡い黄色系の坐蒲團に坐した白髪の老人が畫架に向つて焼き炭をあてやうとする圖で

その人物の背後には和装の書物が置かれた棚が在り、白髪の老畫家の愛に満ちたその顔面には藝術に恵まれた喜び漲つて居た。その取材、表現、内容に於いて『畫三昧』は、櫻谷の生活、思想、藝術的特徴が完全に現出された佳作で、而も、此の『畫三昧』は、櫻谷の完全な自畫像であると思つた。畫人として、人間として敬愛すべき禁慾畫家木島櫻谷は去つた。袴をはき、懷中にはたゞ一冊寫生帳を持つて。

木島櫻谷

通稱文治郎 字文質

別ニ龍池草堂主人 職廬迂人ノ號ヲ用フ
明治十年三月六日 京都市三條通室町東御倉村ニ生ル

十六歳ニシテ今尾景年先生ノ門ニ入ル
昭和十三年夜京阪電車ニ觸レ不慮ノ死ヲ遂ケル

創作

- 瓜生兄弟 京都美術協會出品、宮内省御用
- 野 猪 京都美術協會出品
- 鈞ノ舞 同
- 咆 哮 同
- 落 落 明治廿六年 第六回内國勸業博覽會出品、宮内省御用
- 松 籟 同
- 帝 雲 同
- 灰 燼 同
- 望 郷 同
- 角とく鹿 同
- 外國出品 同
- 伊太利展 同
- 米 展 同
- 佛 展 同
- 牛 小 屋 四十一年 京都美術協會出品
- 渡 頭 明治四十一年

文 展

子 四十二年 同

京都美術協會出品

- 勝手敗手 第一回
- 和 樂 二回
- かりくろ 三回
- 若葉ノ山 四回
- 寒 月 五回
- 驛路ノ春 六回
- 涼 意 七回
- うまや 八回
- 孟 雲 九回
- 港頭ノ夕 十回
- 幕 雲 十一回
- 帝 雲 十二回
- 松 籟 十三回
- たけがり 十四回
- 灰 燼 十五回
- 望 郷 十六回
- 角とく鹿 十七回
- 外國出品 十八回
- 伊太利展 十九回
- 米 展 二十回
- 佛 展 二十一回
- 牛 小 屋 二十二回
- 渡 頭 二十三回

佳作を出した人(2)

森 白 甫 氏

氏は第二回文展審査員として、華々しい脚光を浴びた。聞くところによれば、審査場に於ける行動は、どうも初任とは思えない。天晴れなものであつたらしい。主張しなげればならない事は主張し、協力するところでは協力し、立派な審査員ぶりであつたらしい。我が白甫氏は逸材である。氏は殆んどの小展出品し、又九阜會と讀書會に力作を出品する。讀書會の二曲屏風、紙に鶴を畫いたものは、新らしい試みとして、筆半ばにして意に満たさず、再度筆を起したが、遂に満足するところまでつかなかつたらしい。長い間の構想ではあつたが、決して自己の眼を甘やかさうとしなかつたのだ。氏は花鳥畫に於て從來の花鳥畫の世界を切り拓き、擴充した。今後の公私に於ける活躍こそみものであらう。

上 村 松 篁 氏

氏の文展作「軍鶏」は空間を生かし、温和な中、毅然たる強い精神力を包んだ作品であつた。毅然たる強い精神力を包んだ作品であつた。氏は恵まれた人である。その恵まれた生活様式が又此の人程、畫面に出る事は妙なものである。妙な癖と言ふものがない。一捻り捻つた、いやらしき、わざとらしき、展して來てゐるのである。繪畫は所詮苦行を積まなければならぬものである。生活様式は苦行の色に染められてはならない。管である。貧乏な生活や思想から、偉大な藝術が生れる筈はない。繪畫(藝術)一般に言はば、人間の創造した中で、最も傑出した創作である。どうして日かげに咲かれた花であらうか。どうして又美ましい存在だとも言ひ換へ得る。